

## 編集委員に加えていただき

静岡てんかん・神経医療センター  
溝口 功一

平成20年7月より「医療」の編集委員に加えていただきました静岡てんかん・神経医療センターの溝口です。どうぞ、よろしく願いいたします。私は、てんかん・神経医療センターに勤務しておりますが、パーキンソン病をはじめとする神経難病と認知症が、現在の主な専門分野です。

雑誌の編集という仕事は初めての経験です。もともと、怠け者である上に、筆が遅く、論文もあまり書かなかった私が、編集委員など務められるのか、不安です。ただ、先輩の先生方に教えていただきながら、勉強していきたいと思えます。

「医療」は、関連がある特集を、時々、読む程度でした。また、「医療」を機関誌とする国立医療学会については、総合医学会に参加する程度で、積極的に活動してきたわけではありません。ただ、総合医学会は、医師だけでなく、看護師、薬剤師など、多職種が参加しているため、発表も多彩で、勉強になる学会であると感じていました。

もとより、国立病院機構は全国150病院近くの大きな病院の集団です。また、その中の病院が一様でないこと、つまり、ある病院は急性期病院であり、別な病院は精神科単科の病院でありと、非常に多様である点も大きなメリットであります。そういった大きな多様な集団であるメリットが、今まで、十分には生かされていなかったような気がします。しかし、機構のさまざまな研修や研究班に参加して、国立病院の横のつながりを持てば、なにか面白いことができるかもしれないと考えはじめました。

そんな風に考え始めた最初は、「神経疾患の予防・診断・治療に関する研究」班（湯浅班）に参加させていただいたときです。班長は、前編集委員長の湯浅龍彦先生で、旧療養所で神経難病を中心に診療し

ている病院が40病院近く参加した研究班で、進行性核上性麻痺の診断基準など、神経難病関連であれば、何でも、発表できる研究班でした。そこでは、ほぼ同じ世代の神経内科医が集まっていたこともあり、神経難病をキーワードとして、次第に、連帯感ができてきました。むろん、研究班の班会議終了後の市川駅前の居酒屋で過ごす時間のほうが楽しく、愉快ではありましたが。

また、横のつながりから生まれた勉強会として、東海北陸ブロックでは、年2回神経筋ネットワーク研究会を開催しています。「国立」の時代から、国立病院機構に移行する際、政策医療ネットワークが大変重要視されました。当院が東海北陸ブロックの基幹施設であったことから、当時の八木院長と相談し、東海北陸ブロック会議を開催することになりました。その後、鈴鹿病院小長谷院長からご提案があり、看護を中心としたスキルアップを目指す勉強会という趣旨で、東海北陸ブロック神経筋ネットワーク研究会を開催するようになり、現在まで続いています。平成20年6月に開催した研究会で13回になります。参加施設は、8施設で、内容は、特別講演1題と一般演題6～8題の発表があります。主に看護職からの発表ですが、薬剤師など他職種からの発表もあり、大変ためになる勉強会です。また、発表された中から、参加施設が協力して、「人工呼吸器の回路交換について」などの共同研究をすすめています。同時に神経難病病棟の連絡を密にするための看護師長会も開催しています。

こうした国立病院機構の横のつながりは、意識して維持をしていかない限り、途絶えてしまうものです。総合医学会がその大切な役割を担っていますし、その機関誌である「医療」の役割は重いものがあると思います。これからは、編集委員として、また、国立病院機構の一員として、国立医療学会を盛り立てていこうと考えています。

これからも、ご指導のほど、よろしく願いいたします。